

〈適応指導教室〉

不登校生徒への対応と登校支援

— 動物介在教育（AAE）とチャレンジ登校の実践をととして —

キーワード： 適応指導教室 動物介在教育（AAE） 不登校 登校支援

うるま市立中原小学校教諭 上 原 玲 子

I はじめに

適応指導教室「てるしの」の担任二年目となり、前年度の成果や課題に基づいて、さらに研修をすすめ、児童生徒の心の壁に寄り添った支援をしたいと考えた。

前年度は、「てるしの」の支援マニュアル「生徒支援の手順」に基づいた対応を行い、「レポート作りの段階」では基本的生活習慣を整えること、焦らずに自分を見つめること、安心できる環境などの重要性を確認できた。「集団への適応の段階」では、小集団からメンバーを増やしていくことによる適応への対応や初めての場所や人にどのように対処していくかを実践することができた。「チャレンジの段階」では、本人自身の登校への思いと具体的な行動のギャップについて相談活動をととして明らかにし、目標を立てていくことが出来た。

さらに、「生徒支援の手順」に沿って進めていく中で、体験活動、特に動物介在体験活動が生徒達の癒しやコミュニケーション能力、チャレンジ登校での心の揺らぎの支えとなっていることを実感することが出来た。

そこで昨年度の課題から、生徒一人一人の心の状態をよりきめ細かく捉え、本人の課題を解決するための目標設定を行い、それに向かっての支援を考えていくこととした。そのため研究方針を以下のように焦点化して設定した。

- 1 教育相談の中でセルフモニタリングを行い、それを基に本人と確認しながら適切なアセスメントをとる。
- 2 昨年効果が上がった動物介在教育（以下AAEとする）をとりあげ、アセスメントを踏まえながら計画的に進める。
- 3 原籍校との連携、アセスメントの状態に配慮しながら、チャレンジ登校を計画的に進める。

研究の構想としては、教育相談を基盤として個の課題を浮き彫りにしながら、その上に心のエネルギーを高める活動としてのAAEとその力を試す登校刺激（チャレンジ登校）を行っていききたい（図1）。

II 動物介在教育を通した不登校生徒への心的支援

1 設定理由と研究目的

文部科学省の「学校基本調査」（速報）によると 2007 年度に学校を 30 日以上欠席した「不登校」の小中学生は、前年度比 1.9%増の 12 万 9254 人に上がることが分かった。小、中とも 2 年連続の増加となった。「不登校」とは、「年間 30 日以上欠席した児童生徒」と定義されている。その中でも高等学校の「不登校」については、中途退学し中卒学歴のフリーターやひきこもりへと変化することもあり実態がつかみにくい。高校進学率が 97 %を超える実態から高等学校における長期欠席の実態を把握することの必要性を指摘し、文科省は 2008 年、適応指導教室や民間の施設に通う生徒の出席扱いの奨励を行い高校生の不登校生徒への支援に注目している。

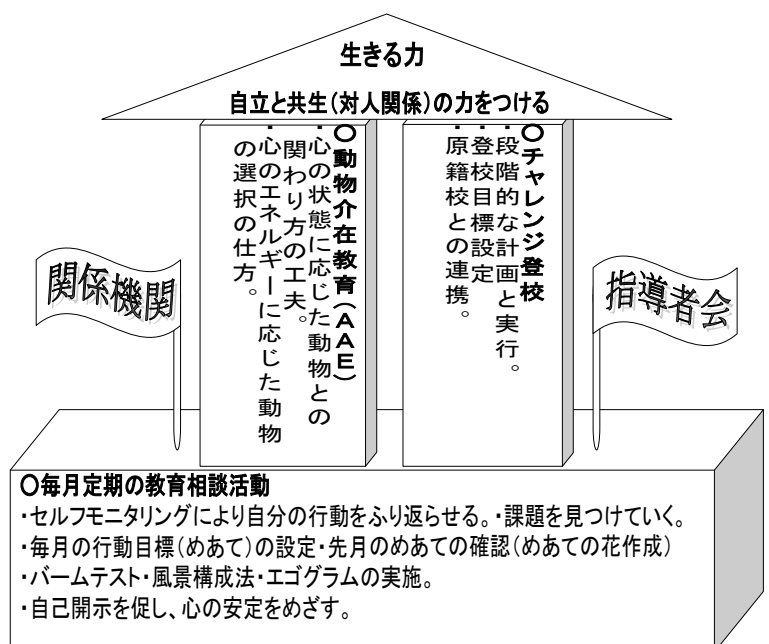


図1 研究の構想

高等学校での不登校生徒たちは、神経症的な課題を抱えていることが多く、気持ちを伝えられないなどのコミュニケーションの困難が見られる。伊藤（2003）は、「高校では、神経症タイプ等重篤なケースが比較的高くなる。欠席・欠課の制限が厳しくなるため（出席しなければ進級できないため、極限の状態まで追いつめられ）不登校（その結果として中途退学）になる率も高い。さらに不登校の4タイプを比較すると、神経症タイプには終日保健室で抱えなければならない重篤なケースが多く、対応にも専門家に託そうという方針が立てられやすい。」と述べている。不登校状態に有効な教師による支援方法として、山本（2007）は「家庭連携」（関係維持・家族支援）、「組織的支援」（校内援助源・別室登校）、「心的支援」（意欲喚起・児童生徒支持）、「登校支援」（人間関係調整・登校援助）、「指導的支援」（学習指導・生活指導）、「専門機関連携」を挙げ、小学生、中学生、高校生の校種間における有効性を調査している。その中で高校生に有効に働く支援は、小中学生に比べると少なく、他校種で再登校に有効となっている関係維持、校内援助源、意欲喚起でも高校生では無効であった。高校生に有意に有効な支援方法はなかった。このように、現在高校生の不登校生徒への支援は必要とされているが、その対応は困難で今後の研究に俟たれている。

「適応指導教室」は文科省の「登校拒否児童生徒の適応指導の在り方に関する調査研究委託事業」等を受け、各県及び市町村ごとに設置が進められ、不登校生徒に対して、学校復帰、社会復帰を目的とした様々な体験活動や心的支援を行っている。本稿の目的は、適応指導教室に通う高等学校不登校生徒に対し、動物介在教育（A.A.E.）を行い、実践をととしてその有効性を検証するものである。

対象の適応指導教室は、公的研究施設内に平成8年に設置された。小・中学校及び高等学校に在籍する心理的要因によって登校できない児童生徒を対象とし、家庭以外に安心できる居場所を与え、集団生活をととして自立心を高め、社会性を養い、学校生活への適応力をつけることを目標としている。A.A.E.の定義は、2001年IAHAIO（人と動物の相互作用国際学会/International Association of human-Animal Interaction Organization）A.A.E.（Animal Assisted Education）により、「A.A.E.は、学校において生徒が動物と接する活動である」と定められ。その方針として「それに関わる動物は健康診断を受けており、適切に管理・飼育されていて動物福祉にも配慮されていること、生徒の知識や学習意欲を向上させ、生き物を尊重する気もちを持たせ、責任感を養うなどの学習目標が設定させていること」が定められた。

当初対象生徒10名中9名が高校生であった。うつ傾向が強い中、動物飼育活動で生徒たちが笑顔を見せ、特に人に対してかたくなな態度しかとれない生徒でも動物たちの無邪気な仕草に喜び、笑顔になるという感情の発露や小動物への声かけが見られた。また、気分の安定が必要な時に自分から小動物のゲージの前で、小動物に触れたり声をかけたりする行動が全員に観察された。

動物との関わりは、動物が命あるものとして生き、活動しているということから、「生命感」に訴えることができるものである。「生命感」とは、自分の体調を感じる「生命感情」（vital feeling）という感性とともに、今向き合っている人や動物が自分と同じ生きて命を持つ存在であることを実感させるものである。中川（2007）は近年の児童生徒の「生命感」のなさを指摘し、「命の大切さは知的言葉では伝わらず、『感性』を言葉で伝えることはできない」と訴え、子どもの成長(感性を培う)に自然体験と「動物」体験が重要であることを述べている。この感性は、「人は生得的に命あるものに注目する傾向がある」というバイオフィリアの理論(E.O.Wilson 1992)に通じ、命あるものの中で生きる喜びや、人の中で生活する喜びを感じるために必要な感性であり「生きる力」の基と考えた。そこで人と関わることに抵抗を感じている不登校生徒に対し動物介在活動を系統的に行っていくことで、心的エネルギーを高め「生きる力」を回復し、人の中で生活する喜び（登校意欲）を育てることができるのではないかと考えた。

本研究では、動物介在教育（A.A.E.）を自我状態との関わりで段階的に行っていくことで、心的エネルギー全般の向上を図る。また、「生きる力」を「自立」「対人関係」の力やスキルの獲得と捉え、行動をモニタリングすることで研究を進めることとした。高校生という発達段階では、自分の状態を自ら観察しながらよりよい状態になっていくことを実感させ、援助者と協働作業で不登校から学校復帰や社会復帰をすすめていくことが可能と考える。そのため、心的エネルギーを「エゴグラム」で、「自立」「対人関係」の行動変容を「セルフモニタリング」の質問紙により検証していくことで実践と研究を深めていくこととした。

2 研究方法及び内容

(1) 対象となる生徒とA.A.E.の期間

今回対象となった生徒は、X年度は、適応指導教室入級判定を受け、心因性（神経症的傾向がみられる）不登校と認定された中学から高校までの7名であった。X+1年度は前年度からの継続2名と12月入級の1名計3名であった。それぞれの在籍期間とA.A.E.の期間は図2で示した通りである。

氏名	心的傾向	X年度 5月6月7月9月10月11月12月1月2月3月	X+1年度 5月6月7月9月10月11月12月1月			
A B C D E F G H	介在動物 種類.期間	ハムスター				
		ウサギ				
		ヨナグニウマ	ヤギ			
	抑うつ傾向					
	対人不安					
	抑うつ傾向		卒業			
	抑うつ傾向		学校復帰			
	抑うつ傾向		卒業			
	抑うつ傾向					
	抑うつ傾向					
	抑うつ傾向					
	選択性緘黙					
		第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	第Ⅴ期

図2 対象生徒とA.A.Eの期間

(2) 用いられた動物とA.A.Eの方法

A.A.E.で用いられた動物は、「ハムスター」「ウサギ」「ヤギ」「ウマ」であった。今回用いたハムスターはいずれも健康で、適性に飼育され、人に慣れたオスのジャンガリアン1匹（生後2年）（07年4月から08年3月に用いたもの）、メスのジャンガリアン2匹（生後1カ月）（08年12月から現在）。ゲージを別にして個体で飼育。ペットショップにて購入、健康診断済み。

ウサギは、07年5月時点生後1カ月オス一匹。ゲージにて飼育。人に慣れ、適性に飼育され、噛み癖がなく、ウサギ用トイレでの排泄がしつけられていた。健康診断済み。

ハムスター、ウサギは、教室内ではなく教室入り口近くの廊下に設置した机の上にゲージを置いて飼育していた。直射日光が当たらず、極端な寒さもない場所であった。活動は、「観察」「スタッフが抱いたものを触れる、なでる」「抱く」「グルーミング」「餌を直接食べさせる」「遊ぶ」「小屋の清掃」「餌の準備」「排泄の世話」であった。

ヤギは、在来種の「シマヤギ」生後4か月であった。近隣の動物園より、1カ月の期間限定で借用した。まだ子ヤギであるため中型犬の大きさで人になっていた。昼は繋牧、夜や雨天時は、一畳半の広さの飼育小屋で飼育。活動は「観察」「グルーミング」「餌を直接食べさせる」「散歩」を行った。

ウマは在来種の「ヨナグニウマ」いずれも7歳の去勢馬3頭で、十分調教され、公的な施設内で子ども乗馬用として3年間使用されている馬であった。栄養状態も良好で、十分な運動施設と小屋が整えられていた。活動オリエンテーションについては、高橋(2005)による「ホースセラピー初期の具体的な進め方」に準じて a 乗馬をしたいという不登校・ひきこもりの人の状態を理解する b 馬と馴染めるよう配慮する c 馬に関する知識を確認する d 相手が馬に乗るときの介助 e 乗馬をしているときの介助を教師とサイドウォーカーが行った。

活動は、「観察」「グルーミング」「鞍つけ」「牽き馬」「牽き馬に乗る」「馬上体操」「ストップアンドゴー（手綱を持って）」「スラローム」「速歩（牽き馬で）」「速歩（手綱を持って）」を行った。

以上の動物を生徒の状態をみながら小型の個体から大型まで段階的に触れ合わせていく。そこで動物への抵抗を減らしていくとともに、自分以外の生き物を受容するキャパシティを段階的に大きくしていくことができた。

基本的な動物との関わりのサイクルは、①ハムスター⇒②ウサギ⇒③ヤギ⇒④ヨナグニウマ⇒⑤ハムス

ター⇒⑥ウサギ⇒⑦ヤギであった。活動内容は下記のとおりであった。①ハムスター:朝の活動での給餌。常時観察、ふれあい可。②ウサギ:朝の活動での給餌。農作業時に畑で散歩。常時観察、ふれあい可。③ヤギ:朝の活動で繁牧。昼休みに散歩を兼ねて移動。④ヨナグニウマ:月に2回、施設へ行く。グルーミング、鞍つけ、牽き馬、馬上体操、サイドウォーカーと乗馬、1人で乗馬(ストップ、ゴー)、スラローム、速歩。⑤ハムスター:朝の活動での清掃、給餌、排泄の世話。⑥ウサギ:朝の活動での清掃、給餌、排泄の世話。⑦ヤギ:朝の活動での清掃。放課後、小屋に戻して給餌。

(3) 指標について

- ① セルフモニタリング: 認知行動療法などで用いられるセルフコントロール法の中心的概念。「自己監視法」とも言う。「自分の問題を自分で処理・解決できるように援助するために用いられる。自己の行動や態度、感情、思考過程等に対する具体的で客観的な気づきをもたらす、評価可能なものとする手続き。」(坂野雄二 1995)。本研究においては、「自立」と「対人関係」の二つの視点からそれぞれ六つの項目について質問紙で五つの段階から選択する形式をとっている(表 1)。この項目は、本適応指導教室において不登校生徒の行動観察用紙の項目として使用してきたものをセルフモニタリング用に改良したものである。改良については、認知行動療法の研究実践歴が 10 年以上ある臨床心理士の助言を受けた。

表 1 セルフモニタリング項目

セルフモニタリングシートNo.1

セルフモニタリングシートNo.2

自立に関すること

項目	視点	観察のめやす（細目）
挨拶		5 臆することなくあいさつができる
		4 相手が聞き取れる声であいさつできる
		3 自分から会釈することができる
		2 スタッフの声かけにうなづくことができる
		1 顔をあげることができる
興味・関心・意欲		5 自分で考えアイデアを生かして活動することができる
		4 自分から進んで活動できる
		3 指示された活動をするすることができる
		2 指示されると教師と一緒に活動できる
		1 指示された活動をすることができない
集中力		5 何事もじっくりやることができる
		4 何事もある程度集中できる
		3 集中するがむらがある
		2 自分の好きなことなら集中できる
		1 短い時間なら集中できる（あまり集中できない）
思いやり		5 仲間以外の人のことを気遣うことができる
		4 自分で考え仲間のために何かをすることができる
		3 仲間のことを気遣うことができる
		2 言われたら手伝いできる
		1 生き物や植物を大切にできる
学習		5 自ら教科や内容を決めてねばり強く学習することができる
		4 与えられた学習課題にねばり強く取り組むことができる
		3 短時間なら自ら教科や内容を決めて取り組むことができる
		2 短時間なら与えられた学習課題に取り組むことができる
		1 学習に関する話題に耳を傾けることができる
自立（生活）		5 自分で見通しを立てて行動できる
		4 自分で考えて行動できる
		3 周りの人をまねて行動できる
		2 言われたことを指示されずに行動できる
		1 言われたことを指示されながら行動している

対人関係に関すること

項目	視点	観察のめやす（細目）
視線		5 相手の目を見ることができる
		4 気の合う人とは目を合わせることができる
		3 時々なら相手の顔を見ることができる
		2 顔を上げることはできるが視線はあわせない
		1 下をうつむきがちに相手の顔を見ることができる
応答		5 大きな声で笑ったり返事ができる
		4 小さな声で笑ったり返事ができる
		3 周りの人に微笑んだり頷いたりできる
		2 気の合う人となら微笑んだり頷いたりできる
		1 相手に何か反応することができる
会話		5 相手に言葉で問いかけることができる
		4 自分の気持ちを話すことができる
		3 気の合う人となら自分の気持ちを話すことができる
		2 自分の意志を表情や身振りで表現できる
		1 話の輪の中に居ることができる
食事		5 みんなと一緒にとることができる
		4 みんなとでも少しならとることができる
		3 特定のひとと食事をとることができる
		2 一人なら食事をとることができる
		1 食事をとることができない
遊び		5 声をかけてみんなと遊ぶことができる
		4 気の合う人を誘って遊ぶことができる
		3 自ら進んで遊ぶことができる
		2 誘われたら遊ぶことができる
		1 一緒に遊ぶべないが、見ていることならできる
外出		5 家の近くで一人で買い物ができる
		4 家の近くに出ることができる
		3 人の大勢いるところに行くことができる
		2 家の近く以外なら外出できる
		1 家から外に出ることができる

- ② エゴグラム: エリックバーンの交流分析(Transaction analysis/TA) 理論に基づき開発された人格図、自我構造分析に用いられる。新里(2008)は、「エゴグラムは、心のエネルギーが自我状態のどこに多く集まっているかを示したものです。中略 自分をコントロールするには、心のエネルギーの分配を適切な形にするのが効果的です。」と述べている。具体的には、個人の放出する特定の行動を五つの自我

状態に分類し、その発生頻度と持続時間を記録することにより個人の心的エネルギーを客観的データとして見るができるようにしたものである。質問紙法のエゴグラムが日本交流分析学会によって作成されている。それぞれの五つの自我状態とは CP…批判的な親の心、NP…保護的な親の心、A…大人の心、FC…自由な子どもの心、AC…順応した子どもの心である。

本研究においては、毎月定期的にカウンセリングの場でセルフモニタリングを行い、適応指導教室における活動全般をととして、「自立」と「対人関係」について自分の変化を振り返りアセスメントをとってきた。エゴグラムについては乗馬活動における変化の測定を意図し、第一回目は、前後一カ月以内に乗馬活動をおこなっていない通常の活動状態（第Ⅱ期）で測定。二回目以降は、月2回の乗馬活動の内2回目の一週間後に、この一週間の状態を思い浮かべながら記入するよう指示して測定したものであった。

関わらせ方の方針としては、適応指導教室の支援（図3）方針に沿いながら、「①心の安まる静かな状況でスタッフと一緒に動物に触れながら、ACに働きかける。②動物の小屋の清掃や排泄の世話をしながらNPにはたらきかける。③動物と遊んだり乗ったりすることでFCに働きかける。④動物を動かしたり、しつてたりすることでCPに働きかける（この時、動物に無理がないようにスタッフがそばにつく）。⑤すべての活動をセルフモニタリングすることでAに働きかける（図4）。」とした。X年度入級直後の生徒にハムスターを関わらせた。観察からいずれの生徒もACが高いと判断された（エゴグラム資料省略）。これは、「神経症傾向と関連があるのはAC（自己否定・他者否定）であり、ACが高い人は、対人関係の中でさまざまなストレスを感じやすい」というCMI（Cornel Medical Index）の尺度との相関の結果（新里 2007）とも一致した。そのため、関わりのスタートは、ACの視点から行った。当初10名を対象におこなったが、X+1年には、状況が変わった。10名中2年目に継続したのは3名となった。さらにその内1名が入院となり、対象生徒は2名となった。対象の2カ年を第Ⅰ期（X年5、6、7、8月）第Ⅱ期（X年9、10、11、12、X+1年1、2月）第Ⅲ期（X+1年4、5月）第Ⅳ期（X+1年6、7、9月）第Ⅴ期（X+1年10、11、12、1月）と区分した。

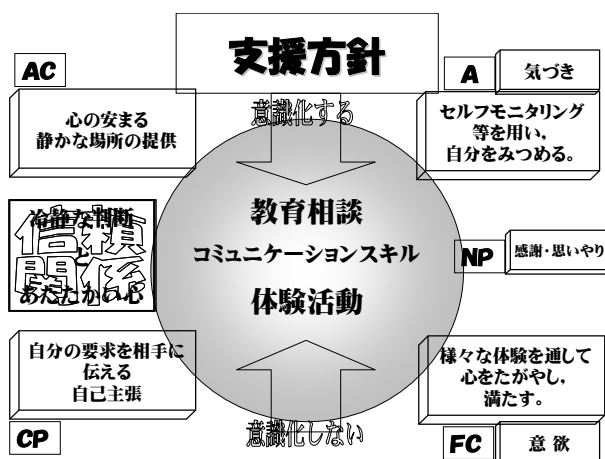


図3 支援方針

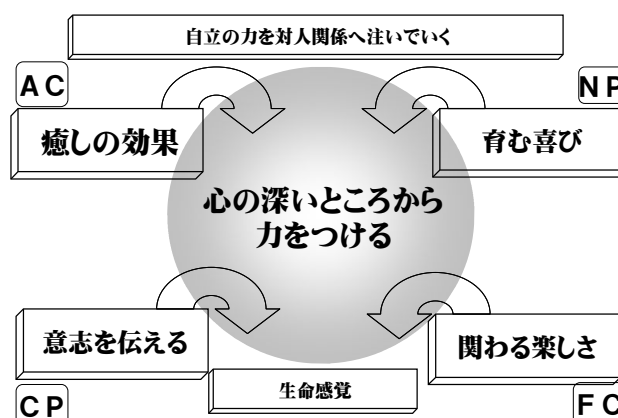


図4 AAEによる支援

3 結果

(1) 自立について（図5）

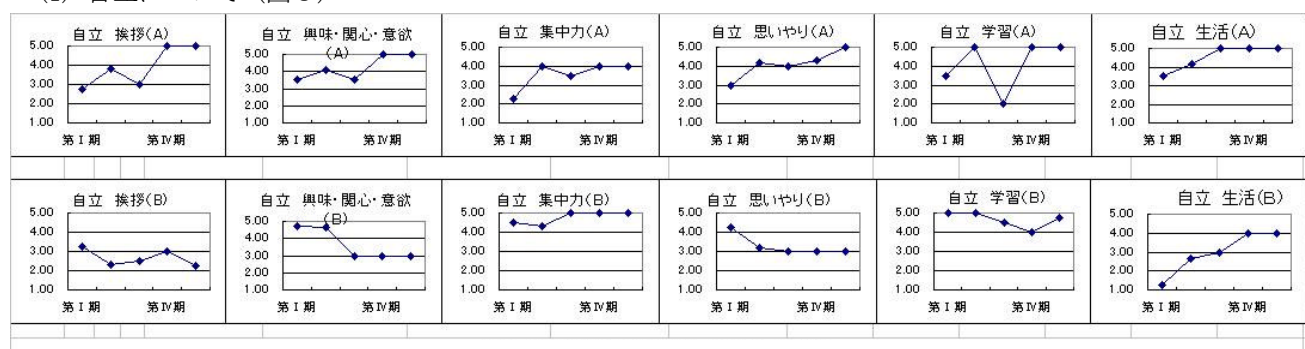


図5 セルフモニタリング（自立）グラフ

第Ⅰ期、生徒Aは、視線をあわせられない会話ができない状態であった。下をうつむき、声もほとんど出さずに、首を振るなどの動作で意志を伝えていた。生徒Bは、会釈することができ、学習や活動に集中して取り組むことができていたが、やはり下をうつむきがちであった。エゴグラムの状態（新里 2007）で見ると

AC の高い行動が観察されていた。そこでスタッフの働きかけとしては、「聞き手にまわる」「私にどうしてほしいのですか」という AC に寄り添う態度や言葉かけを行った。A.A.E.は毎朝ハムスターとウサギを用い、スタッフと一緒に「見る」スタッフが抱いたハムスターやウサギに「触れる」「なでる」「餌を直接食べさせる」を行った。その後乗馬を生徒Aは2回行った（「グルーミング」、「牽き馬」、「馬上体操」）。生徒Bは「グルーミング」のみ行い騎乗しなかった。

第Ⅱ期、生徒Aは6項目すべてにおいて+がみられた。生徒Bは、「生活」のみ+で「学習」は変化なし、「挨拶」「興味・関心・意欲」「集中力」「思いやり」の項目では-になった。生徒Aは、自分から挨拶し、自分から活動を行い、周りの仲間に対してお茶を入れるなどの気遣う行動が見られ、自分で決めた学習に集中して取り組み、自分で考えて行動することができた。生徒Bは挨拶では頷く程度、活動に対しては自分から行うが意欲的な発言がなくなった。集中できずにその場から立ち去ることがあった。配慮した行為ができる相手とできない相手がいた。

第Ⅲ期、生徒Aは、「生活」以外のすべての項目で-となった。特に「学習」については第Ⅰ期よりも値が下がり、短時間（5～15分）しか取り組みなかった。生徒Bは、「挨拶」「集中力」「生活」の項目で+となった。「興味・関心・意欲」「思いやり」「学習」では-であった。第Ⅲ期はX+1年度の開始時期となり、第Ⅲ期の前1カ月半は、A.A.E.を含む適応指導教室すべての活動がなかった。Ⅲ期に入りハムスター、ウサギの「観察」「スタッフが抱いたものを触れる、なでる」「抱く」「グルーミング」「餌を直接食べさせる」の活動から再開した。

第Ⅳ期、生徒Aはすべての項目で+となった。生徒Bは、「挨拶」「生活」の項目で+となった。学習が-となり、「興味・関心・意欲」「集中力」「思いやり」で変化はみられなかった。A.A.E.では、第Ⅲ期のハムスター、ウサギの活動を継続するとともに「遊ぶ」「小屋の清掃」「餌の準備」を行った。シマヤギの活動が始まり、「観察」「グルーミング」「餌を直接食べさせる」「散歩」を行った。乗馬活動も月2回定期に行い、生徒Aは、「観察」「グルーミング」「鞍つけ」「牽き馬」「牽き馬に乗る」「馬上体操」「ストップアンドゴー（手綱を持って）」「スラローム」「速歩（牽き馬で）」「速歩（手綱を持って）」のすべてのプログラムを行った。生徒Bは、「鞍つけ」までがほとんどであった。一度だけすべてのプログラムを行ったがその後「鞍つけ」までに戻った。

第Ⅴ期、生徒Aは、「挨拶」「興味・関心・意欲」「思いやり」「学習」「生活」の項目でMax5となった。「集中力」は変化がなかった。生徒Bは、「学習」で+となったが第Ⅲ期と同じ値だった。「挨拶」は-となり第Ⅲ期の値に戻った。その他は変化がなかった。A.A.E.の活動では、「ハムスター」「ウサギ」で生徒Aは「排泄の世話」ができるようになった。乗馬活動について生徒Aは、第Ⅲ期と同様であった。生徒Bは、「観察」「グルーミング」「鞍つけ」までを行い、その他は見学していた。

(2) 対人関係について（図6）

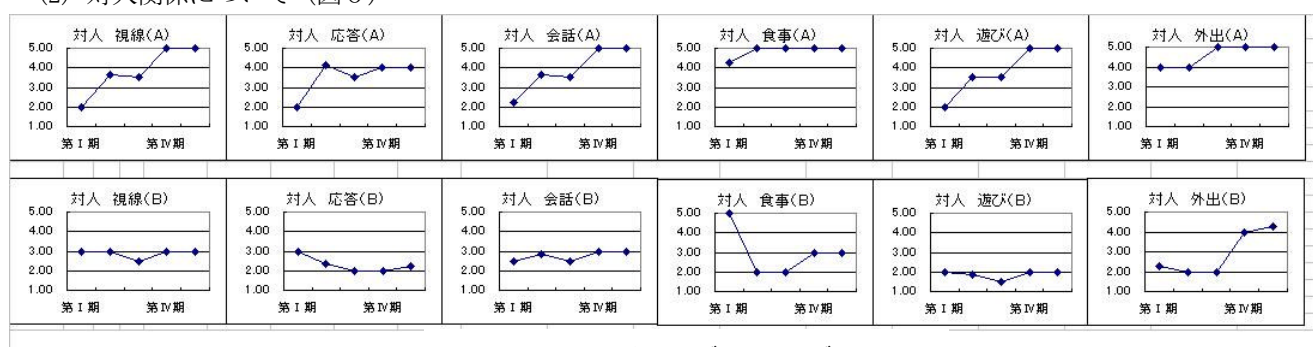


図6 セルフモニタリング（対人）グラフ

「対人関係」の項目で生徒Aに関しては、「自立」とほぼ同じ経過が見られた。特徴的であったのは、「自立」においては、第Ⅲ期の落ち込み特に「学習」の落ち込みが顕著であったのに対し、「対人関係」においては、「学習」のような極端な落ち込みは見られず、「食事」「遊び」で変化なし、「外出」では+になっていることであった。

生徒Bについては、第Ⅱ期からの-が顕著で、第Ⅱ期6項目中「応答」「食事」「遊び」「外出」で-、「視線」は変化なし、「会話」でわずかに+であった。また第Ⅲ期においては、6項目中「視線」「応答」「会話」「遊び」で-となり「食事」「外出」が2のレベルで変化なしだった。特に食事についての落ち込みが激しく、食事を取れないことがあったため、家庭に連絡し食事摂取の確認や欠席時の家庭訪問をその都度行った。

第Ⅳ期には「視線」「会話」「食事」「遊び」「外出」の項目で+となった。第Ⅴ期も+または変化なしの状態を保ったが、「応答」「食事」については第Ⅰ期の状態まで回復しなかった。「外出」は、2ポイントの上昇がみられた。A.A.E.については、「自立」と同じ内容であった。

(3) 心的エネルギーについて (図7)

セルフモニタリングにおける+の増加時期(第Ⅳ期)が定期の乗馬活動の開始と重なっていた。乗馬活動の効果と心的エネルギーの状態をみるためにエゴグラムテストを行った。

第Ⅱ期のエゴグラムは、過去2カ月以内に乗馬活動を行っていない時のものである。全体的にエネルギー

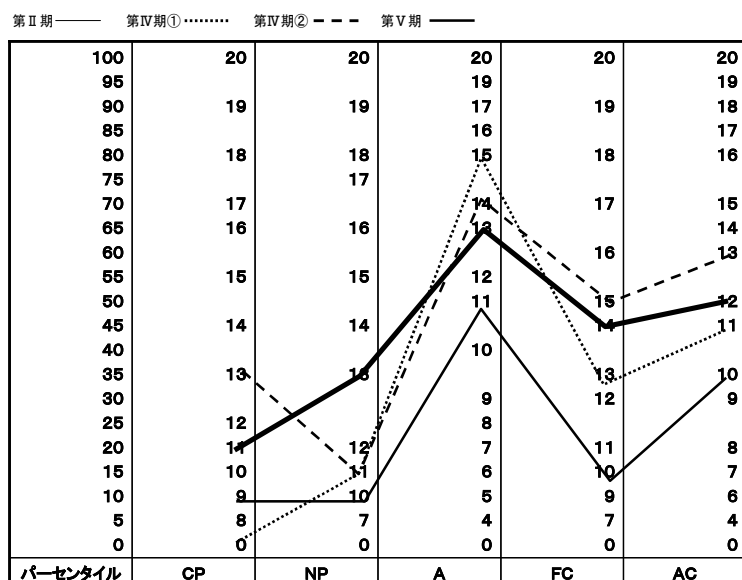


図7 エゴグラム結果 (A)

が低く、A, ACが高い、神経症的なNタイプとみることができた。その後A.A.E.を継続し、第Ⅳ期①(乗馬を開始して1週間後の結果)ではCP-8, NP+1, A+5, FC+3, AC+1, total+2の上昇がみられた。第Ⅳ期②, 乗馬6回目, CP+12, NP+0, A-1, FC+2, AC+2, total+15であった。第Ⅴ期, 乗馬8回目, CP-2, NP+2, FC-1, AC-1, total-2となった。第Ⅰ期からみるとCP+2, NP+2, A+2, FC+4, AC+2, total+12となった。心的エネルギーの上昇が確認できた。笑顔が増え、「馬に乗って駆け足するのを目標にしたい」という発言もあった。この時期の生徒Aのセルフモニタリングの総合的な値は、図8のとおりであった。

4 考察

本研究では、日常的な小動物を用いたA.A.E.と施設を使つての「ヨナグニウマ」による乗馬のA.A.E.が行われた。目標となっている「生きる力」「心的エネルギー」の上昇について「セルフモニタリング」と「エゴグラム」による効果測定を試みた。それぞれ二つの要素は影響を及ぼしあっていると考えられるが、その影響や境界については触れないこととした。「生きる力」については小動物、乗馬の双方を考慮し「セルフモニタリング」で効果を捉えた。その他の活動、個人的要素については無視した。「心的エネルギー」については、主に乗馬活動と捉え、「エゴグラム」で効果を捉えた。

(1) 「生きる力」とAAE

「生きる力」を「自立」「対人関係」の側面で見ただけの場合、適応指導教室における日常のA.A.E.は効果をあげているといえる。第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけて値の下がった生徒Bについても第Ⅰ期の中の数値を見ると、「自立」で6項目total+2,「対人」で6項目total+1となっていた。第Ⅱ期は、適応指導教室に入級生徒が増え、対人不安を持つ生徒Bに大きく影響したと思われる。特に食事等では、全員が食事をする場にいられず、部屋から出ていくことも多かった。その際生徒Bは、小動物のゲージの前で過ごしていた。

第Ⅲ期については、年度が変わり、1カ月半の間適応指導教室での活動が全くなかった時期であった。生徒達は、各家庭と原籍校での面接や別室への登校を行っていた。生徒Aは原籍校からの登校刺激に対し、「これだけやってもらっているのに、自分はまだ登校することができない」と発言し、高校を続けることに自信をなくし退学を考えた。「学習」の項目の落ち込みはそれを表していると考えられる。生徒Bも別室の登校の後、「とても疲れた」と発言し、適応指導教室への来室のリズムを取り戻すのに時間がかかった。継続予定の生徒に対

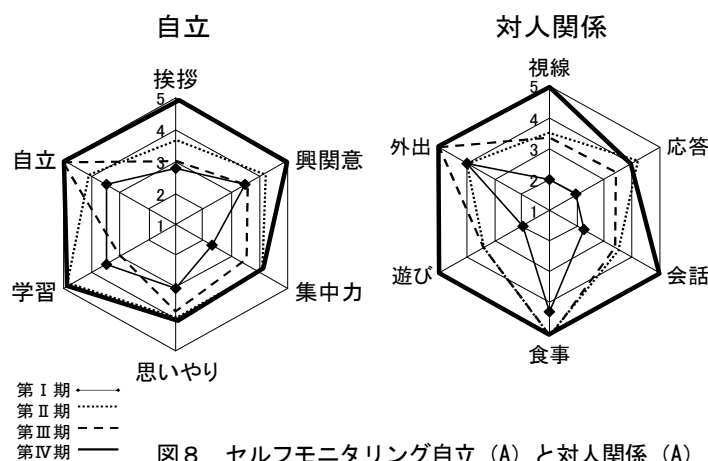


図8 セルフモニタリング自立 (A) と対人関係 (A)

し、適応指導教室開級前にどのような支援や原籍校との連携が取れるのか課題となった。第Ⅳ期は日常の活動が再開し、新年度の乗馬活動もⅣ期後半に本格的に開始した。生徒 A、B 共にセルフモニタリングが上昇し、行動の変化が顕著になった。このことから適応指導教室における日常の A.A.E.が生徒の「生きる力」に有効に働いていると考えられる。

(2) 「心的エネルギー」と AAE (ヨナグニウマにおける乗馬活動)

ヨナグニウマによる乗馬活動第Ⅳ期より定期に開始した。生徒 A において、乗馬活動のない第Ⅱ期のエゴグラムでは A と AC の値が高かった。そこでエゴグラムによる自己変容のプログラムとして A や AC に関わるのではなく、乗馬を通して FC に関わることにした。FC と設定した理由は、日常の小動物との活動において生徒 A がハムスターやウサギに対し机の上に乗せて遊ぶ、障害物において乗り越えさせるなどの FC の発現がみられたからである。ヨナグニウマの乗馬では、騎乗し、遊び感覚で楽しく速歩などをした。サイドウォーカーも楽しい話題で接した。第Ⅱ期4回の乗馬がすみエゴグラムをとったところ FC が3ポイント上昇していた。次に CP に注目し、乗馬の「ストップアンドゴー」「スラローム」において「ハイ」「ダー」「右」「左」の指示とともに「言葉の理解できない馬には『進め』『止まれ』『曲がれ』と思いをこめて指示を出すことが大切。」ということを教示した。このような活動を2回行い、1週間後のエゴグラムでは、CP が13ポイント上昇し、本人も意図していなかったため驚いていた。生徒 A は、「速歩すると頭がシャッフルされる感じがする」と発言し、「ウマで駆け足してみたい。」と目標も持てるようになった。第Ⅴ期には、最後の NP に注目し「ヨナグニウマへの感謝」がポイントとなった。乗馬の後のグルーミングで『ありがとう』を伝えてね」というサイドウォーカーの言葉に反応した。また、日常の小動物との関わりでは、ゲージの清掃や排泄の世話をまかせることができた。その後のエゴグラムでは、変化がみられなかった NP が3ポイント上昇していた。生徒 A の自我状態の変容は AC→FC→CP→NP の流れであることがわかった。

生徒 B について乗馬活動は「観察」「グルーミング」「鞍づけ」までが主で騎乗することはほとんどなかった。本人は「馬は好きだけど乗ると疲れる。」と言っていた。第Ⅳ期の6回目に担任から乗馬の意味について説明をした。生徒 B の対人への抵抗をとる効果や意志を伝える力をつけるのに効果がある旨説明した。その直後突然自ら乗ってみたいと言い出し、騎乗し「速歩」まで挑戦し、周囲を驚かせた。その後は「見学」に戻った。自己変容への抵抗がみられた。今後この「抵抗」をどのようにはずしていくかが課題だが、生徒の A に関わっていくことで変容が望めるのではないかと感じられた。

以上のことから総合的に考察すると各自我状態の発現順位から、教師など関わる側とのラポートをとる場合、まず AC の部分を安心させていくことが大切であることがわかった。その方法としては、ハムスターやウサギを介在させながら、教師が抱いた小動物を見たり、触れたり、餌を食べさせたりすることであった(写真1)。初め「噛まない?」と不安がる生徒もいたが、すべての生徒が興味を持ち、ハムスターにひまわりの種等をあげ、その仕草を見ていた。その時、たとえ初対面であっても、教師のそばに立ち、手に触れたりすることができた。これは、触覚による感覚統合の働きとみることができる。感覚統合による効果を津田は、「アニマルセラピーの三角形」と表現し、人に触れることのできない子どもが犬と触れ合う中で隣にいる他の子どもに触れられても平気になり、仲良く一緒に犬をなでることができると説明している(津田 2001)。その段階が過ぎ、教師とのラポートもとれてくると生徒は小動物をゲージから自分で出し、手のトンネルで遊ばせたり、回し車に入れてみたりするようになる(ハムスター)。



写真1 小動物との日常的な活動
(感覚統合を生かして)

これが、FC の発現である。表情も驚いたり、笑ったりと豊かになってくる。しかし、まだゲージの清掃やトイレの片づけには抵抗を示すことが多く、スタッフの助けがないと世話することはできない。この段階までくると CP への支援ができるようになると思う。しかし、CP を出すためには、対象動物がある程度人を理解する知能と拒絶できる力を持っていることが条件となり小動物では難しくなる。そこでシマヤギを用いてみた。シマヤギを繋牧する時、道端の草を食んで進行方向と異なる方向に向かった時、「ダメ」という言葉とリードを引く行為が必要になる。シマヤギはイヌほど指示に従わないため、何度も声をかけることとなる。それはとても疲れる行為だが、それを乗り越えることができた生徒は、かなりの心的エネルギーを獲得している。その後 NP の発現としてのゲージの世話、トイレの片づけができるようになる。

以上の A.A.E.のプログラムは、それぞれハムスター、ウサギ、シマヤギという 3 種の動物を飼育しながら日常におこなってきた。これらをすべて網羅できるのが、乗馬活動であった。特にヨナグニウマは小型で扱いやすく、児童生徒にむいている。グルーミングで触れながら AC を安定させ、乗ることで FC にはたらきかけることができる。自分で手綱を持つ頃には CP の高まりがみられ、ボロの片づけで NP への働きかけが可能である。今回のプログラムでは、CP までとなったが、行動面ではかなりの変化が起こり、生徒 A は、再登校の力を得ることができた。また、今回の研究と実践から各動物介在教育の活動がどの自我状態に作用しているかを推測することができてきた。(表 2)

表 2 AAE による自己変容指標

順番	対象生徒の状態	活動内容	目標とする自我状態	エゴグラム	用いた動物	判断行動・言葉
①	適応指導教室入室当初、 気持の落ち込みが強い時	・見る・触れる・ 抱っこする ・エサをあげる	・安定して素直な状態 ・守られている安心した状態	AC	・ハムスター ・ウサギ ・ヨナグニウマ	・自分から動物に触れる 「かわいい」「気持ちいいね」「あったかい」
②	安心しているが無気力な状態、 スタッフとのラポートがとれている	・上記の活動 ・遊ぶ	・生き生きと活動的な状態 ・感情を素直に出せる状態 ・いろいろなものに興味や関心を示す状態	FC	・ハムスター ・ウサギ ・シマヤギ ・ヨナグニウマ	・笑顔や笑い声が出る ・ユーモアのある言葉 ・一緒に遊ぶ・のる 「おいでー」
③	今までできていた活動に興味を失う 感情に流されやすくなっている	・動物について学ぶ ・セルフモニタリング ・エゴグラム	・できないことをなぜなのか分析して次につなごうとする ・自分の関わり方をふり返ることができる状態	A	・ハムスター ・ウサギ ・シマヤギ ・ヨナグニウマ	・動物との活動の意味を知ろうとする ・動物を観察する 「どうして?」「なぜ?」
④	動物に十分ふれあうことはできるが自分の気持ちを表現できていない 上記①②③の目標を達成していること	・中型以上の動物を牽いたり、指示を出したりする	・自分の要求を出すことができる状態	CP	・シマヤギ ・ヨナグニウマ	・動物の行動を制止する ・しつける・叱ることができる 「ダメ」「ダー」「ハイ」「よしよし」
⑤	上記①②③④の状態を満たしているが、心に余裕がなく、落ちこんだり、怒ったりと感情に不安定さがみられる 人を受容できない	・動物のゲージの清掃 ・給餌の準備 ・出産や病気への対応 ・死への対応	・献身的な愛情を注ぐことができる状態 ・自分の要求を相手の立場を考慮して表現できる状態	NP	・ハムスター ・ウサギ ・シマヤギ ・ヨナグニウマ	・感謝の言葉が出る ・自分から進んで排泄の世話をする ・自分から言葉をかける 「大丈夫?」「〇〇するからね」「ありがとう」

5 今後の展望と課題

今後表 2 の指標を基に観察シートを作成し、動物介在教育（乗馬活動）を行うことで、活動の意図する内容が対象生徒に効果的に影響しているのかをチェックしながら、その判断に役立てたい。また、それと同時に観察シートの指標や観察基準となっている行動や発言が一般的なエゴグラムの行動や発言と一致してくるかをみることで、観察シートの妥当性も高めていきたい。

今回、対象生徒の卒業等ですべてのプログラムをこなしたのは生徒 A のみであったため、データが不十分であった。また生徒 B が乗馬活動に進めない「抵抗」については、どのように弱めていくかが、今後の課題となった。しかし、動物介在教育が生徒の心的エネルギーの上昇やバランスに作用していくことを確認することができた。また、動物の種類や活動内容によって自我状態のどの部分に働きかけるかを処方することができるのではないかと今後の展望をもつことができた。特に乗馬においては、自我状態全体への作用をプログラムすることができるため、今後の研究で実践を重ね、その有効性を証明していきたい(写真 2)。またこれらを実施するにあたり、アセスメント段階で A.A.E.を個々に合った形に構成していくことが重要になってくる。



写真 2 ヨナグニウマふれあい広場の活動

これにより、今後不登校生徒が A.A.E.によって自我状態をコントロールしていけることが可能であることが証明されれば、不登校生徒のみならず、すべての児童生徒の心の教育に大きく寄与することが期待できると思われる。

Ⅲ チャレンジ登校の実際

1 登校支援について

本適応指導教室は、一年をサイクルとし3月中旬には閉級するため、3学期には原則として全員がなんらかのチャレンジ登校を行い、3月から4月の繋ぎの期間に備える必要がある。そのための登校支援とは、精神面で支えとともに、実際に学校へのアプローチを行い、体験的脱感作法等を用いた具体的な行動支援が必要である。

「生徒支援の手順」によると「チャレンジ登校の段階」での留意点は、「生徒の自主性が高まり、自信を持って集団活動に参加できるようになっていること」「自己理解・他者理解を深めて信頼感がとれるようになるよう支援すること。」「あせらず、段階的に行動させること。」となっている。また、教育相談の中では、「認知行動理論を生かし、前段階までのセルフモニタリングの経過を意識させる。」「今までの活動を振り返らせ自信をつけると共に、自分の目標を確認させる。」「登校の具体的な目標をスモールステップで立てる。」ことが必要になる。状況判断（アセスメントをとる）のポイントとしては、「『登校に関する事項』（登校目標・校門登校・別室登校・教室登校）での観察」「在籍校担任との関わり」「クラスメイトとの関係修復」などの視点を持つことがあげられている。（「問題を抱える子ども等の自立支援事業に関する研究報告書平成19年度」参照）

2 方法および内容

チャレンジ登校の手順は、原則として「①適応指導教室指導者会での確認 ②本人との面接による目標設定とアセスメント ③原籍校との調整 ④計画 ⑤実施中の調整 ⑥原籍校との連携 ⑦ゆらぎへの対応 ⑧登校後のケア」である。

(1) 適応指導教室指導者会での確認

「チャレンジ登校」の対象生徒とは、適応指導教室担任による活動状況報告に基づき、十分な準備(心的エネルギーの確保)ができたと判断される生徒、または登校への意志をはっきりと持つ生徒が挙げられる。その対象生徒は、スーパーバイザー、教育相談主事等で構成される会議において確認され、計画の方針が立てられる。

(2) 本人との面接による目標設定とアセスメント

十分な準備が整ったと判断される生徒に対し、「チャレンジ登校」の趣旨を確認して具体的な計画を立てる。その際、長期目標、短期目標、学校に登校する意志を確認しながら計画をたてることが大切である。ただし、今回は高校生であったため、セルフモニタリングや本人との計画も効果が高まるが、小学生の低学年であったり、「登校したい」という思いが強すぎる生徒であったりする場合など、本人のアセスメントを丁寧にとり、個に応じてその方法を考える必要がある。

(3) 原籍校との調整

事前に生徒の準備が整ったことを電話で伝える。具体的な「チャレンジ登校」に必要な人員や場所、行事予定などの確認をする。仮の計画ができれば FAX などでも原籍校での可否を検討してもらう。

(4) 計画

原籍校からの確認に基づいて予定を組んでいく。今回の内容は、以下の項目であった。

- ① 出前授業…原籍校の担任及び教科担任に「適応指導教室」に出向いてもらい補習をしてもらう。
- ② 昼食会…原籍校別室でクラスメイト3～5人と担任と一緒に昼食をとる。昼食後に簡単なゲームや活動の時間をとる。
- ③ 学習会…原籍校別室で担任及び教科担任と補習をする。その際なるべく全科目の教科担任と出会うよう曜日や時間を設定する。
- ④ テスト受験…原籍校別室でのテスト受験。試験監督は適応指導教室の担任が行う。テストや学習に対する抵抗が特に強い場合、事前に基礎学力からの補習と試験範囲の正確な把握、テスト対策をしっかりと行う。
- ⑤ 校舎見学…平日生徒が行事などで体育館に集合している時間に校舎内を見学する。学校全体の概要を案内図などで確認する。靴箱を確認する。生徒の教室の確認をする。自分の席をできれば着

席して確認する。ロッカー、掲示物で係や当番の確認をする。教室を中心にトイレ、特別教室、保健室など学校生活で利用する動線を確認するように校舎内を動き、見学していく。事前に靴箱、ロッカー、机等の確保、掲示物に氏名があるか原籍校に確認を依頼しておく。授業見学の際の入室の動きの検討やシミュレーションをする。

- ⑥ 授業見学…担任などラポートの取れている教師の授業、補習などで授業内容が十分理解できる授業の見学。参加ではなく見学であるため、自己紹介など注目を集めることはしない。事前にどのような動きで教室に入るかイメージしておく。生徒の視線の向き、入室の際のドアの解放、席の場所に配慮する。
- ⑦ 行事見学…文化祭、講演会、始業式、終業式などを見学する。体育館や講堂などの後から見る。
- ⑧ 部活見学（参加）…生徒の趣味や特技をいかした部活動や同好会を見学（参加）する。その際活動内容の確認と顧問との調整を行い、生徒の状態に対応して声かけができるように依頼する。

(5) 実施中の調整

毎回のチャレンジ登校の目標を設定する。ひとつひとつ登校の段階が進んでいくことを実感することができる。同時に、学校に入るといふ抵抗から意識をそらすように働き、登校をスムーズにする。

計画通り実施できなかった場合、どこまでできて、どこからが困難だったのか明確にする。うやむやに不安を残したり、漠然とした安心でごまかしたりしない。次のチャレンジの目標や内容を調整する。

(6) 原籍校との連携

「チャレンジ登校」の学校側の調整をする担当として、学級担任や、教育相談担当があたる。相談室の予約、教科担任との調整、全体への生徒理解や「チャレンジ登校」理解のコンサルテーションをおこなってもらう。

学級の生徒達への対応。安定した学級経営と学級内で適応指導教室から来る生徒が人間関係を作れるように適切な人選と環境作りを行う。

授業見学の前に面識のある生徒達が支え合えるように事前の話し合いを持つ(ピアサポート)。

「チャレンジ登校」に対する学校側の対応を記録してもらう。

(7) ゆらぎへの対応

「チャレンジ登校」の主体が適応指導教室から原籍校へと移っていく過程で、不安から後戻りしたり先に進めなくなったりすることがおこる。その時落胆してゼロに戻るのではなく、どこまではできていて、どこからが難しいのか、もう一度見つめ直して確認する。ここまできたら適応指導教室担任は、なるべく一緒に登校することは止め、事後のケアや学級担任のサポートに回るようにする。教室に入るまでは、生徒の気持ちに添いながら連絡を取り合う。

(8) 登校後のケア

一旦教室に入ったなら、事実上適応指導教室担任の仕事は終了であるが、定期的に学級担任をとおして様子を確認する。欠席が三日以上続く時や節目には声をかけるなどのケアを行う。また保護者が弱気になりそうな時には、押し出して行けるよう支援していく。適応指導教室で獲得した力が確かなものであることを保証するという意識で見守り、心の支えとなることが大切である。

3 チャレンジ登校の実際(適応指導教室担任の対応を中心に)

(1) 生徒A

① 適応指導教室指導者会での確認

08年11月27日 指導者会 これまでの状況報告に基づき4月から登校可能と判断された。

08年12月11日 指導者会 本人への登校復帰と適応指導教室担任の離任があることから不安定になるが、担任の離任をきっかけに強力に登校へと押し出していくことを再確認す。

② 本人との面接による目標設定

08年11月26日 教育相談(適応指導教室にて) 4月からは適応指導教室に来ることができない。しかし、学校に行く自信もないという不安を持っている。→4月学校復帰という案と来年度二学期(9月)復帰の2案で対応していくという方向が出された。

08年12月04日 教育相談(適応指導教室にて) 11月27日の指導者会の決定に基づき、4月学校復帰の方向に決定した旨を本人に伝える。本人からの明確な答えはなかったが、登校への原案を了解した。

③ 原籍校との調整

08年12月10日 ファックスによる調整
09年01月07日 担任会での確認（表3）

表3 チャレンジ基本計画 生徒A

チャレンジ基本計画 生徒A		
将来の夢(長期目標) 音楽関係の仕事につきたい		
夢を叶える為にやるべきこと		
・作詞活動	・作曲活動	・高校卒業
・ギターの練習	・演奏会	
学校復帰のためのチャレンジ		
・昼食会	・同好会見学	
・テストを学校で受ける	・追試合格	
・カウンセリング室での学習会	・授業見学	

登校目標 '09年度 4月より学校復帰		
さんの心の目標		
'08 12月	高校卒業について考える。	夢に関する行動目標 ・ギターの練習 ・音楽関係の施設訪問
'09 1月	自分の中でこだわっていることを言葉にできる。	・作詞活動
'09 2月	夢や目標のための具体的な行動を自分から行うことができる。	・作曲活動
'09 3月	自分の登校をイメージすることができる。	・演奏会

学校に関する行動目標	
・昼食会(1回)	・部活見学会
・学習会(1回)	・昼食会(2回)
	・学習会(4回)
	※クラスメイトとのピアカウンセリング(支え合い)について
	・校舎見学
	・授業見学(3回) てるしの担任と一緒に
	・昼食会
	・授業見学(最低週1回)

④ 計画及び実施（表4）

表4 チャレンジ登校計画

チャレンジ予定表(1月)						
日	月	火	水	木	金	土
1月4日	1月5日	1月6日	1月7日	1月8日 ※1	1月9日	1月10日
		高校始業式	てるしの始業式	学習会(カウンセリング室)am11:00~12:30	追試(カウンセリング室)am09:00~12:30	
1月11日	1月12日	1月13日	1月14日	1月15日	1月16日 ※2	1月17日
			昼食会am12:50~		作曲同好会見学pm4:00~	
1月18日	1月19日	1月20日 ※3	1月21日	1月22日	1月23日 ※4	1月24日
		出前授業日本史			学習会・昼食会(カウンセリング室)	
1月25日	1月26日	1月27日	1月28日	1月29日	1月30日	1月31日
		昼食会am12:50~				

チャレンジ予定表(2月)						
日	月	火	水	木	金	土
2月1日	2月2日	2月3日	2月4日	2月5日	2月6日	2月7日
		学習会2:05~				
2月8日	2月9日	2月10日	2月11日	2月12日	2月13日	2月14日
		校舎見学1:45~			漢字検定	
2月15日	2月16日	2月17日 ※5	2月18日	2月19日	2月20日	2月21日
		昼食会12:50~			期末考査	
2月22日	2月23日	2月24日	2月25日	2月26日	2月27日	2月28日
		授業見学10:10~				
		昼食会12:50~				
		昼食会(2)	校舎見学会(1)	期末考査(3)	授業見学会(1~2)	

⑤ 実施中の調整

計画表中の※印に対応して調整を行った。

※1…1月08日 新学期始まってすぐの学習会ということでとまどいが見られた。教科担任の参加をとりやめ、適応指導教室担任と学級担任のみに変更

※2…1月16日 作曲同好会の見学で他の生徒の都合が悪くなり、生徒とあうことができなくなった。担当の教師と会い、今までの活動の様子を聞いた。

- ※3…1月20日 朝突然、日本史の学習をしないと言い出した。電話でキャンセルを伝える。
- ※4…1月23日 カウンセリング室で学習会を行う。その後の昼食会が連絡ミスでキャンセルになる。
- ※5…2月17日 テスト最終日、心のゆとりがあり、昼食会まで待つことができた。

⑥ 原籍校との連携(資料1)

「チャレンジ登校」に関して行った調整や状況について月に一度まとめ、適応指導教室担任と共に確認する。それにより次回の支援の方向性を定めていく。

⑦ ゆらぎへの対応

09年3月23日 てるしの担任ではなく保護者と学校へ向かう。登校時の人混みで校門をくぐれなくなる。→家に帰ったあと、適応指導教室担任と一緒に再度登校する。できることを確認する。

⑧ 登校後のケア

まだ登校できず、実践していないが、登校後も返信はなくともメールを送り支援を続ける予定。

(2) 生徒B

① 適応指導教室指導者会での確認

08年11月6日 指導者会(スーパーバイザー、適応指導教室担任、原籍校担任、保護者、相談担当主事) 欠席が続き出席日数の不足が懸念されること。本人は高校への登校を強く望み適応指導教室への来室に疑問や不安を抱いている。かといって登校する力はない。→適応指導教室での活動の意味を伝えていく。担任や活動に抵抗を示しても、それを取り除くのではなく経験が自分を強くしてくれるということを伝えていく。「チャレンジ登校」については、長期的な目標を設定し、それに向かって進んでいるという実感を持たすとともに、今自分が登校に関してできることとできないことを確認する意味から実施していく。

② 本人との面接による目標設定

08年12月4日 来年度の三学期に学校復帰という目標と将来の夢について自分から提案した。そのために適応指導教室でどのような活動をするか、「チャレンジ登校」をどのレベルまでするか話し合い計画の素案を作成した。

③ 原籍校との調整

08年12月10日 ファックスによる調整

09年01月07日 担任会での確認(表5)

表5 チャレンジ基本計画 生徒B

チャレンジ基本計画 生徒B			
将来の夢	動物関係の仕事につきたい		
夢を叶えるためにやるべきこと	・動物の世話 ・動物の保育体験 ・動物病院見学 ・家で動物を飼う ・獣医の話を聞く		
学校復帰のためのチャレンジ	・昼食会 ・部活動に参加する ・式などの学校行事への参加 ・授業見学 ・カウンセリング室での学習会		
目標 '10年度 3月より学校復帰			
Bさんの心の目標	夢に関する行動目標	学校に関する行動目標	
'08 12月 高校卒業について考える。	・動物介在体験活動 ・動物関係の施設訪問	・昼食会(1回) ・部活見学(1回)	
'09 1月 自分の中でこだわっていることを言葉にできる。	・飼育体験	・部活見学 ・昼食会(2回) ※クラスメイトとのピアカウンセリング(支え合い)について	
'09 2月 夢や目標のための具体的な行動を自分から行うことができる。		・部活見学 ・校舎見学 ・昼食会 ・学習会	
'09 3月 自分の登校をイメージすることができる。		・授業見学 (てるしの担任と)	



④ 計画(表6)

表6 チャレンジ登校計画

チャレンジ予定表(1月)						
生徒B						
日	月	火	水	木	金	土
1月4日	1月5日	1月6日 ※1	1月7日	1月8日	1月9日 ※2	1月10日
		浦添商業始業式参加 am9:00~	てるしの始業式		部活見学pm4:30~	
1月11日	1月12日	1月13日	1月14日	1月15日	1月16日	1月17日
1月18日	1月19日	1月20日	1月21日	1月22日	1月23日	1月24日
	昼食会12:50~				部活見学pm4:30~	
1月25日	1月26日	1月27日	1月28日	1月29日	1月30日	1月31日
簿記検定					昼食会12:50~	
チャレンジ予定表(2月)						
日	月	火	水	木	金	土
2月1日	2月2日	2月3日	2月4日	2月5日	2月6日	2月7日
			小犬保育体験		課題締めの切(商・産)	
2月8日	2月9日	2月10日 ※3	2月11日	2月12日	2月13日	2月14日
		浦商期末考査 課題締めの切(漢)				
2月15日	2月16日	2月17日	2月18日	2月19日	2月20日	2月21日
	レポート提出				昼食会・勉強会12:50~	
2月22日	2月23日 ※4	2月24日	2月25日	2月26日	2月27日	2月28日
	昼食会・勉強会12:50~		職場見学 (ながみね動物クリニツク)		校舎見学11:10~	

⑤ 実施中の調整

- ※1…1月06日 12月の終業式の見学ができていたことを受け、当初予定になかった始業式の見学を電話で確認して行った。体育館の後ろに座って最初から最後まで見学することができた。
- ※2…1月09日 バトミントン部への入部について考えていたため、見学を計画したが担任との都合があわなかった。初日なので担任の繋ぎが大きいと考え次回に延期とした。
- ※3…2月10日 登校を考えるのなら試験を受けられるようになったことは大切と考え計画したが、本人から辞退があった。課題提出と重なり十分なテスト対策ができなかったためテストへの不安があったと思われる。次年度対応する際はテスト範囲の確認とテスト対策を事前に行い自身をつけさせたい。
- ※4…2月23日 以前から弱かったお腹の調子が悪くなり腸炎を起こし欠席した。「チャレンジ登校」のストレスも関係しているのではないかとと思われる。

⑥ 原籍校との連携

今回の「チャレンジ登校」は本人の登校への力試しの意味が強かった。実際の登校の目標は1年後と設定してあるため、今回の「チャレンジ登校」を参考に次年度の活動や原籍校での支援方針を作成していきたい。

原籍校に対し今回の様子を伝え、全校への共通理解をはかってもらった(資料2)。それにより原籍校での次年度の支援体制が整い、よりよい支援が行えると思われる。

⑦ ゆらぎへの対応

生徒Bの場合、本格的な学校復帰ではないため、不安や抵抗を確認することを目的とした。そのようなゆらぎが出た場合、一旦「チャレンジ登校」を休ませる対応を行った。実際後半は体調不良になった。また次年度行うときに、今年度のことを思い出せるよう記録を残しておきたい。

⑧ 登校後のケア

生徒Bについて今年度は行わない。

4 考察

(1) 生徒Aに関して

「チャレンジ登校」の最初の計画段階で、適応指導教室担任が今年度で変わることを告げた。その時点から大きな不安感を抱くようになっていた。一緒に計画を進める段階になってもなかなかその不安を取り除くのが難しかった。後半、教室見学等の段階で登校への見通しが立つようになり、少しずつリラックスした話

ができるようになっていった。この不安感のために「チャレンジ登校」の毎回の振り返りや次の目標設定がスムーズに行えなかった。

- ① 追試や期末考査等のテストへの抵抗はかなり少なくなっていた。それでもテスト前の学習ではうつ伏せて顔があげられなくなったり、他の活動まで進められなくなったりすることがあった。学習への準備は綿密に行いたい。そのためには、原籍校からの課題とテストの関連性、テスト範囲、テストを受ける状況について正確に把握し、本人と確認しながら計画的に進めていくことが大切である。
 - ② 適応指導教室担任との協働の鈍さと学習への抵抗との兼ね合いで、「チャレンジ登校」が計画どおりすすまなかったり、時間的に間延びした計画になったりした。授業見学を少なくとも3回は行いたかったが、実際は1回となってしまった。また、実際に他の生徒が登校する時間での登校の練習ができなかった。それが「ゆらぎ」となってしまった。春休みを利用して、登校時間での登校練習をする必要がある。
 - ③ 登校しようとしてもまた以前のように登校が難しくなってしまった（ゆらぎ）が出た際、それをしっかり受け止めながらも、それを想定内としてきちんと分析し次に繋いでいくことが大切である。
- (2) 生徒Bに関して
- ① 登校への気持が強く、まだ十分な力が蓄えられていないと分かりながら、適応指導教室にも馴染めず苦しさが増していった。活動は動物介在など意識化せずに行うことで効果が上がるものが多かったが、方針を変更し、活動の意味をしっかりと説明して本人が意識して活動に取り組めるようにしていった。
 - ② 今回の「チャレンジ登校」はまだ実際の登校は難しいと判断されたのにもかかわらず実行していった。それは、本人の登校への意志が強く、他の生徒の「チャレンジ登校」が本人の焦りとなって他の活動に影響すると判断したことと、実際にやってみて自分の現実を把握する必要があるためである。
 - ③ 今回の「チャレンジ登校」では、毎回のチャレンジを確認しながら協働で進めることにより、信頼関係をより強くすることができたのがよかった。
 - ④ 後半は、本人の身体症状が強く出てしまい予定通りにはできなかったが、本人も満足し、次へのステップとなっている。それは、最初で登校目標を、来年度に置いたことで「今登校できなくても大丈夫」と納得できたからだと思われる。
 - ⑤ 来年度は、この経験を確認した上でより綿密な計画とより強い信頼関係の下、登校へと確実な「チャレンジ登校」の計画を立てていく必要がある。そのためには、年度初めに確認し、それまでに心的エネルギーを蓄える諸活動をしっかり行っていくことと学習への対応が必要である。

IV まとめと今後の課題

1 まとめ

- (1) 昨年度の課題を解決する方向で今年度の研究を進めていけたことがよかった。「動物介在教育」「チャレンジ登校」双方とも生徒に寄り添いながら教室外で行う活動であったため、臨機応変な対応と担任が生徒と共に教室外へ出ていく活動が必要であった。今回適応指導教室担当主事初め、センター内の管理機関による迅速な判断と手続きで効果を上げることができた。今後とも機敏に動ける体制を継続していきたい。
- (2) 「チャレンジ登校」の心的支援の最後にきたのが「学習支援」であった。今年度は、継続の生徒に対し5月から補習時間を確保し、中学からの基本的学習を行うことができた。また、漢字検定試験の合格、定期考査や追試験の受験と合格等は、大きな自信につながった。その際センター内の教師が補習講座の指導や、課題学習のチェック行うことは本適応指導教室の強い支えとなった。
- (3) 「動物介在教育」については人、昔から情操教育に効果があるといわれているが、なかなかその具体的な良さが理解されず、研究成果として挙げられているのも少なかった。今回エゴグラムを用い、生徒の心の状態を診断しながら行うことで、効果を確認できたことがよかった。
- (4) 「動物介在教育」において、「NP0 ヨナグニウマふれあい広場」の協力の下、乗馬の専門的な技能とサイドウォーカーによるアニマルセラピーの心的支援を得ることができた。適応指導教室では基本的な活動が主になるため、専門的な広がりがあり効果を上げられた。
- (5) 「チャレンジ登校」では、原籍校との連携が特に重要であり、綿密な計画と臨機応変な対応が要求される。今回2校との連携がおこなわれたが、2校共に校長、教頭初め、担任、教育相談担当が協力的で生徒を積極的に支援してくれたことが実施の支えとなっていた。
- (6) どのような活動でも生徒と相談し、セルフモニタリングの変化をおさえながら目標設定することで、無理

なく、無駄を抑えて行うことができた。言葉かけや活動内容を決める際に生徒一人一人の心の状態を把握していることが重要であり、セルフモニタリングのみならず様々なカウンセリング理論や療法を参考に丁寧なアセスメントをとっていくことが必要であることがわかった。

- (7) 生徒の不安が強まり、苦しさを避けようとして担任に対して反感を持ったり、来室できなくなる状態になったりした時があった。そのような状態でも怯まずに適度な距離を保ちながら電話、メール、家庭訪問、保護者へのアプローチ等関わりを続け、支えていく存在であることを諦めずに感じさせていくことで再起の力を与えることができることがわかった。
- (8) 教室経営について、今年度「教室経営案」を4月に作成したことで1年間の経営方針がしっかり立てられた。それを基に関係者、保護者の理解を得られたことは、様々な活動を支持してもらうことにつながり活動がスムーズであった。

2 課題

- (1) 今回の生徒は2年目ということもあり、多くの教室外での活動があった。外での活動は、教室内よりもエネルギーを使うため、体調やその日の状況で本人の気が向かず、予定通りに行かないことがあった。できなかったことをマイナスにとらえ翌日からの活動に響くこともあった。その時すぐに生徒に対応していくことが大切であるが、人員が不足しその時間をとることが難しかった。相談体制の充実が望まれる。
- (2) AAEの有効性が分かってきたが、事例が少ないこと、生徒Bに対する事後の支援方法の確立などから今後も実践と検証を継続して積み重ねていくことが必要である。
- (3) 生徒の支援のためのアセスメントが重要であることがわかったが、それを適切に記録し、次へつなぐための「個別支援シート」などが作成できなかった。状況報告書を代替していたが、今後生徒一人一人に丁寧に対応していくための「個別支援シート」（仮称）の作成が望まれる。
- (4) 生徒へ対応できるスタッフが少ないため、活動方法や支援方法の向上のための研修時間の確保や外での活動への対応が難しかった。特に「チャレンジ登校」の際には、教室に残していく生徒への対応や活動の充実のためにボランティアスタッフで対応したが、生徒が慣れるまでに時間がかかること、スタッフとして教室の活動内容の理解や生徒理解に時間がかかることで、体験入級がスタートしたばかりの生徒への対応が不十分になった。正規の人員確保が望まれる。

〈主な参考文献〉

- 小林正行 2009 『不登校支援と未然防止』 東洋館出版社
- 沖縄県立総合教育センター 2008 『問題を抱える子ども等の自立支援事業に関する研究報告書』
- 新里里春 2008 『交流分析とエゴグラム第二版』 チーム医療
- 太田光明 2007 『アニマルセラピー入門』 IBS出版
- 中川美穂子 2007 『相手の感情と身体を理解する脳を作る』～動物飼育体験活用教育の在り方と成果～. 文部科学時報
- 山本奨 2007 『不登校状態に有効な教師による支援方法』 教育心理学研究
- 岩本隆茂 福井至 2006 『アニマルセラピーの理論と実際』 培風館
- 伊藤絵美 2005 『認知療法・認知行動療法カウンセリング』 星和書店
- 下山晴彦 2005 『よくわかる臨床心理学』 ミネルヴァ書房
- 高橋良臣 2005 『不登校・ひきこもりのカウンセリング』 金子書房
- 船井哲夫 2005 『心を読み解くユング心理学』 ナツメ社
- 津田望 2004 『アニマルセラピーのすすめ』 明治図書
- 不登校問題に関する調査研究協力者会議 2003 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』
- 文部科学省 2003 『不登校への対応について』 文部科学省
- 中島義明編 1999 『心理学辞典』 有斐閣
- 坂野雄二 1995 『認知行動療法』 日本評論社

《学校での対応の概要報告》

(1) 月

学校名
記入者

高等学校

1. 児童生徒への関わりについて

チャレンジ登校が始まることを事前に職員会議で報告。A さんを見かけたら普通に笑顔で挨拶することと、教科担任との顔合わせや授業の機会が持てるよう協力依頼。HR担任もクラスの生徒へ事前に事情を伝え協力依頼。昼食会の人選や準備・教室の整備等に配慮し、チャレンジ登校の成功に向けて取り組んだ。

2. 保護者への関わりについて

てるしの担任の上原先生を通して連絡をとる。

3. 登校したときの児童生徒の様子について

(登校日数、登校場所、活動内容等)

- ・ 1 / 8 (木) 11:00 ~ 12:30
 目的: 学習会 場所: カウンセリング室
 活動内容: 天野先生(数学)、當間先生(物理)、捷呼先生(保体)が、カウンセリング室に顔を出し、教科書や授業の内容等を話しながら顔合わせをした。
- ・ 1 / 9 (金) 9:00 ~ 12:30
 目的: 前年度の追試受験 場所: カウンセリング室
 活動内容: てるしの担任の上原先生の監督で、3科目(数1、数A、古典)を受験。わりと余裕があるように感じられた。
- ・ 1 / 14 (水) 12:50 ~ 14:00 場所: カウンセリング室
 目的: 昼食会
 活動内容: クラスの生徒5人(生徒会活動をしており思いやりのある生徒達に依頼)担任を含む8人で昼食会。話題もゲームもリラックスしたいいい雰囲気で行われ、笑顔も見られた。5人の生徒達も A さんとの触れあいを喜んでおり、終了後、また A さんと昼食をしたいとの声が出た。
- ・ 1 / 16 (金) 16:00 ~ 17:00 場所: 美術教室
 目的: 作曲同好会の見学
 活動内容: てるしの担任の上原先生は席をはずしていたが、顧問の先生とギターを弾きながら談笑していた。そばに他の生徒がいても気にする様子はなかった。
- ・ 1 / 20 (火) 14:00 ~ 15:00
 目的: 宮城辰也先生(日本史)出前授業でてるしのへ
- ・ 1 / 23 (金) 11:00 ~ 14:00 場所: カウンセリング室
 目的: 学習会
 活動内容: 砂川先生・雅美先生(英語)、天野先生(数学)と顔あわせ。30分ほど英語の教科書を広げながら授業の話や世間話しをする。自習課題をもらう。
- ・ 1 / 27 (火) 12:50 ~ 14:00 場所: カウンセリング室
 目的: 昼食会
 活動内容: 前回に引続き2回目の昼食会を実施。生徒5人+上原先生+HR担任が参加生徒は、前回と1人入れ代わっていたが、A さんは気にする様子は無く、楽しそうにしていた。

2年 組 番

B さんに関して

平成 21 年 3 月
教育相談委員会

1. これまでの経緯

① 入学以前の状況

中学時代に男生徒達から悪口を言われたり、給食の残り物を机に入れられたりなどのいじめを受ける。家庭では父親から肉体的暴力や言葉の暴力を受けてきおり、高校入学直前に両親は離婚している。このようないじめが原因で絶えず不安を抱え、集団に適応できなくなっている。特に男性に対しては極度の恐怖心と不信感を持っている。

② 本校入学後の状況

平成 18 年度

平成 18 年度に本校情報科に入学し、4 月 12 日までは教室で授業を受けていたが、13 日に不安や恐怖心から泣き出し、それ以降はカウンセラー室で過ごすようになる。またいじめにあうのではとの不安を訴える。症状としては手や身体の震え、息苦しさ、めまい、腹痛などがあつた。5 月まではカウンセラー室登校をしていたが届出欠席が多くなる。担任の 先生や教育相談 先生) の勧めで適応教室「てるしの」への通級を試みるが続かず、学年途中で休学する。

平成 19 年度

4 月から復学し、教室に入ることを試みるがその後に体調不良を担任 先生に訴える。養護の又吉先生から適応教室「てるしの」への通級はどうでしょうかとの提案があり、本人、母親、教頭先生、宮城先生、又吉先生、仲村を交えて話し合いを持ち、本人も「てるしの」へ通級したいと後日申し出て、「てるしの」へ通級がスタートする。「てるしの」では本人の心身の発達に応じたきめ細かいプログラムが組まれ、「てるしの」での担任の上原玲子先生や多くの先生方の熱心な指導と共に本校での担任 先生) の親身な指導と諸先生方の理解・協力があり、1 年間頑張り通すことができ、精神的に大きく成長した。

生の両担任にはかなり心を開くようになり、笑顔が多くなってきた。

(担任所見)

ある程度の基礎学力はあり、理解力がある。読書が好きで多くの本を読んでいる。性格はおとなしく、繊細で思いやりのある心根の優しい生徒である。去年に比べて自分を変えねばという意欲が強くなっている。前年度までは何事も母親まかせであつたが、今は独立心も強くなり、「てるしの」への通級も本人が自ら選択している。

平成 20 年度

2 年に進級する。本校担任の 先生、「てるしの」での担任上原玲子先生

の親身な指導・援助と連携がうまくいき、「てるしの」でのプログラムを順調に取り組んでいる。本人は自分の意見や考え方を両担任に話すなど、かなり意欲的になってきた。検定試験にも挑戦するようになり、簿記検定3級合格、漢字検定準2級合格などを果たす。紆余曲折はあるものの両担任の親身な指導・援助に支えられ1年間を乗り越えつつある。(平成20年度の終了式は3月17日)

2. 平成21年度の当初の計画(上原玲子先生より)

平成21年度の4月から、学校に戻し、教室で授業を受けるのはまだ無理である。2学期まで「てるしの」へ通級し、その間、学校にも通い(学校行事や講演会等に参加)、学校に徐々に慣らして、3学期は本格的に浦添商業に登校して授業を受け、卒業をめざす。そのためには「てるしの」と 学校 の連携を密にし、1, 2学期で本人をできるだけ本校に連れてきて、学校に慣れさせるようなプログラムを工夫していきたい。

3. 計画の見直しが必要(環境の変化に伴い)

①これまで2年間、適応教室「てるしの」で B さんの担任であった上原玲子先生が平成21年度の人事異動で転勤することになった。B さんにとって最も心を開いて話せる上原先生の転勤はかなりのショックである。

②上原先生の後任の先生は男性の方である。B さんの男性に対する不信感と恐怖心はまだ払拭されておらず、今後やっていけるのか不安である。

③平成21年度の適応教室「てるしの」への通級予定者が現時点で2名おり、その2人とも男子生徒である。

このような B さんを取りまく環境の変化があり、平成21年度はこれまでのように「てるしの」へ通級することが困難になることが確実である。そこで 学校 でも別室登校を考えるなど、何らかの対応策があれば考えて欲しいとの要望が、適応教室での現担任の上原先生や主導主事の先生からあった。

4. 本校からの提案

- ①これまで通り平成21年度も適応教室「てるしの」へ通級を基本とする。「てるしの」への通級が困難な場合は、適応教室「てるしの」での別室登校の検討をお願いする。そして徐々に環境に適応させ、「てるしの」への戻すようにする。そして学校行事や講演会、進路講話、学級活動などはできるだけ本校で参加してもらい、3学期は本校への通学をめざす。

②1週間の4日は適応教室「てるしの」へ通級する。残り1日は本校の教育相談室登校へ登校し、課題等をこなす。3学期からは全面的に本校へ通学して卒業をめざす。